

出土品から地域歴史を学ぶ公開授業

—遺跡からの出土品を教育活動に生かす取り組み—

教育庁教育総務局文化課では、装飾古墳館と連携して本年度から「見て、触れて、感動して」をテーマに、「郷土くまもとの文化財や先人の業績等に触れ、子どもたちがふるさとに誇りを持ち、次世代に伝えていく心を育む」ことを目的に小学校を対象に公開授業を実施しました。

初年度は、博物館等から遠くなかなか本物を見る機会が少ない地域から実施していこうということで、球磨郡湯前町の湯前小学校と八代市南部に位置する二見小学校の2校で行いました。

まず、湯前小学校では、社会科の授業（単元「大昔の暮らし」）で球磨郡内の遺跡から発掘された弥生時代から古墳時代までの本物の出土品を活用した学習をしました。さらに、授業後半には弥生時代の遺跡から発掘された勾玉を参考に勾玉づくりをして学習をさらに深めました。

一方、二見小学校では、夏休みの学校行事として体験学習を取り入れた八代地域の歴史学習を行いました。児童たちは、校区内にある身近な文化財を学んだり、八代地域で発掘された本物の出土品で弥生時代から平安時代までの当時の生活を学んだり、縄文時代の弓矢や勾玉づくりを体験するなどさまざまな活動を通して歴史学習をしました。

今回の公開授業のあと、「こんな身近に大昔のものがあるとはびっくりした」とか、「大昔の人たちがどんなものを食べていたかもっと勉強したい」などの感想があり、本物から得た感動より新たな学習意欲が出た児童がたくさんいたようです。

この公開授業は、平成28年度も県内で2校実施することになっています。さらには、平成29年度からは公募制にして希望された小学校で実施する予定としています。総合的な学習の時間や学校行事等でご希望される学校は、教育庁教育総務局文化課までご相談ください。



湯前小学校での社会科の授業のようす



勾玉づくりの体験活動



本物の出土品について学習する児童のようす